

令和 4 年 5 月 26 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K02581

研究課題名(和文) 漢代における物語のジャンル横断的研究 古代的宗教世界の解体を承けて

研究課題名(英文) A Cross-jenre Study on stories in Han Dynasty

研究代表者

谷口 洋 (TANIGUCHI, Hiroshi)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：40278437

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)： 早期の賦や『史記』における神話的・宗教的要素とその変容について、俯瞰的な論考を発表するとともに、そこにみられる戦国の世の物語・漢武帝の世の物語についてそれぞれ考察した。また、前漢末の揚雄や後漢の文人について、その作品や、その他の自己言及の分析を通じ、自己を語る物語についての考察を発表した。これらの成果を通じ、漢代における物語の諸相について、史伝・歌・賦・文などのジャンルを超えて明らかにした。

また、『漢書』礼楽志の訳注を完成し、こうした物語世界の基層を解明するための材料を整備した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

漢代は、文学史においては低調な時期ととらえられることが多く、研究対象も個別の作家や個別の作品にとどまっていた。概括的視点から眺めるにしても、史伝・賦・文・楽府・古詩などの各ジャンルが別個に考察されてきた。本研究では、それらを横断する軸を設定して、神話が力を失った後の「物語の時代」として漢代をとらえ直し、その固有の意義を明らかにすることができた。

また、『漢書』の「志」のうち訳注がなされないままになっていた礼楽志について、その訳注を完成したことは、文学にとどまらず思想や歴史の研究にも寄与しうるものである。

研究成果の概要(英文)： In addition to publishing an overarching discussion of the mythological and religious elements and their transformations in the early Fu literature and "Shi ji"(Records of the Grand Historian), we discussed each of the stories of the Warring States period and the Emperor Han Wu era found therein. Other discussions presented us with the narratives about the self of Yang Xiong of the late pre-Han and other literary figures of the Later Han Dynasty through an analysis of their works and other self-references. Through these achievements, various aspects of the story in the Han dynasty were clarified across genres such as historical biography, songs, poems, and proses. We have also completed a translation and commentary of the "Han Shu Li Yue Zhi"(History of the Former Han Dynasty vol.22), and have developed materials for elucidating the basis of these narrative worlds.

研究分野：中国文学

キーワード：中国 漢代 物語 文学 史記 賦 歌謡 ジャンル横断

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、申請者が平成 19 年度から 21 年度にかけて行った科学研究費補助金基盤研究(C)「戦国秦漢期の諺・歌謡・文学作品と物語」(以下「研究 1」と表記する)と、平成 22 年度から 25 年度までの同「早期辞賦の伝承と「作者」をめぐる伝説」(以下「研究 2」)を出発点とする。

上記の研究は、いずれも、辞賦や歌謡などが、特に前漢までにあつては、伝承の過程でそれにまつわる物語を伴っていたことを解明したものである。その過程で浮かび上がったのは、漢代文学のさまざまな局面において、物語が重要な地位を占めているということであった。

たとえば、研究 1 の成果の 1 つである論文「『史記』にみえる秦末漢初の歌と伝説」(2009)では、『史記』に残される荊軻・項羽・劉邦の歌について、それらの歌が実際にその人物によって作られたかは問題でなく、むしろ「物語の中の欠くべからざる要素」として見るべきであることを指摘し、「歌が物語の節目において、滅亡の悲劇への扉を開き、主要な人物、それもほとんどの場合は滅びゆく人物に光を当てる、重要な機能を果たしていること」を解明した。

一方研究 2 においては、歌謡よりも長大で、テキストとして安定しているはずの辞賦においても、伝承の過程においては物語と切り離せないことを、宋玉・司馬相如を主要な例として明らかにした。論文「巫山の朝雲」(2013)では、『文選』に宋玉の作品として収められる「高唐賦」「神女賦」などのテキストが、実際には宋玉にまつわる物語を「後世の概念で裁断したり綴じ合わせたりした結果である」ことを論じた。また、論文「口吃と消渴」(2013)では、前漢の司馬遷の時代に確かに存在したはずの司馬相如の辞賦が、言葉の不思議な力によって活躍するヒーローの伝説という型にはめ込まれた上で語り継がれていったことを述べた。研究 1 の成果である論文「賦に自序をつけること」(2010)において総論的に論じておいたように、「前漢までについてわれわれが「作品」とよんでいるものは、実は物語に取り込まれた曖昧な存在なので」ある。

このように考えてくれば、漢代、なかんづく前漢を、「物語の時代」と規定することも可能であろう。正統的な文学史では、漢代文学の精華は『史記』『漢書』などの散文であり、またこの時代に急速な発展を遂げた辞賦であつて、小説・演劇などは未成立または未発達とされ、『史記』や古楽府などの物語性が個別に論及されてきたにとどまる。しかし漢代は、古代の神話的伝承が大きな変質を被る一方で、より世俗的な伝承がまとまった形をとり始めた時代であつた。ここに、「物語の時代」が「神話の時代」の終焉に続くものとして立ち現れたのである。

中国において、神話を承けるものとしての物語を考える際、従来は六朝の古小説が注目されてきた。しかし物語的伝承はもっと古い時代からあつたはずであり、天水放馬灘秦簡に「志怪故事」と名づけられたものがあることが示すように、その記録も従前考えられてきた以上に早くから残されている。申請者のこれまでの研究によれば、漢代における物語的伝承の中には、六朝古小説の世界を先取りしたようなものも少なからずみられる。ただし本研究では、それらをただ形の相似から小説の前駆としてのみとらえるのではなく、古代的神話世界から六朝の物語世界への流れの中に位置づけることが目指されているのである。

ただこの点を実証的に論じるには、その基層にある文化の変容をふまえる必要がある。申請者はこれまでも、辞賦の起源についての考察や、漢代の国家祭祀歌謡である「安世房中歌」「漢郊祀歌」の研究を通して、古代の宗教性の変容の問題を考えてきた。本研究においては、こうした基層的文化の研究にも力点を置き、これまで主たる対象としてきた文学テキストの背景により深く踏み込む。そしてそこから得た知見に基づきつつ、ジャンル間の越境はもとより、今日的な基準での文学テキストとそれ以外の境界をも越えて、漢代物語世界を全体としてとらえようとするのである。

## 2. 研究の目的

漢代は、古代の神話的世界観の崩壊を承けて現れたより世俗的な物語的伝承が、様々な場面において形として現れた時代である。本研究は、辞賦をはじめとする漢代文学の成立過程や、『漢書』礼楽志などの記述から、まず漢代における宗教文化の変容を明らかにする。そしてそれをふまえ、『史記』『漢書』などの史伝にみられる物語的伝承はもとより、辞賦・古楽府などの深層にある物語的要素をジャンル横断的に読み解く。漢代の資料を神話の古代的原像の復元のために用いた旧来の神話学に対し、漢代物語世界それ自身の広がりや重層性を明らかにし、中国文学史・文化史における漢代の新たな位置づけをめざす。

漢代において物語的伝承を最も豊富に収録するのは『史記』である。『史記』の物語的研究の重要性については、申請者自身、論文「『悲劇の星雲』との格闘」(2005)で論じたところだが、その後の研究が辞賦や歌謡を中心とした方向に向かっていたために、十分に推進されてはいない。『史記』における物語世界の広がりや示すことは、当然本研究の目標に含まれる。

一方、辞賦をはじめとする韻文文学も、物語との深い関係を持っている。辞賦についていえば、たとえば狩獵賦は、「司馬相如「天子游獵賦」における天子の自失と善政の場面について」(2011)などにおいて明らかにしたように、異界への出游による神霊との交流という神話的物語を、かなりの変質を被りつつも基盤にもっている。また尹湾漢簡「神鳥賦」のように、全体が一つのスト

ーリーをなす賦も存在する。古楽府においても、物語としての筋をもつものや、何らかの物語を背景としておぼしきものがまみられる。さらに文学テキスト以外では、画像石にも、「鴻門会」「二桃殺三士」のような物語を背景とするものがみられる。

これらは、「鴻門会」が『史記』に基づき、「神鳥賦」が古楽府と似るように、相互に関連しているのだが、文学史の方法では、ジャンル別の縦割りになって、その関連が分断されてしまう。それを横に結びつけ、古代神話と六朝古小説との間に位置する「物語の時代」としての漢代像を提示することが、本研究の最終到達目標である。

なおその前提として、漢代文学に残存する古代的要素の痕跡を、辞賦の起源や『史記』の構成などの具体的問題に即して明らかにしておきたい。漢代のさまざまな文学は、古代的世界からの離脱という大きな問題をそれぞれに内包していたのであり、そのことをふまえてはじめて、古楽府のようなより民衆的なジャンルをも含めた相互比較が可能となるのである。

本研究の第一の特色は、物語という視点から、散文・韻文といったジャンルにとらわれず、漢代文学を全体として捉えようとする点にある。古代文学の研究対象は、煎じ詰めれば「うた」と「ものがたり」とに集約できるが、実はその両者は互いに絡み合っていたというのが、申請者がこれまでの研究から得た知見であった。中国文学におけるジャンルの細分化と確立が、後漢あたりから漸く現れ始め、魏晉南北朝に顕著になることに照らしても、漢代の文学については、ジャンルを超えた視点から総合的に捉えるのが有効であると考えられる。

ただ、漢代の物語世界は常に物語の形をとって現れるわけではない。そもそも、より古い神話的世界についても、中国においては断片化したり底流に追いやられたりする傾向が顕著であり、それらを発掘・収集して神話的原像を再構築するのが、出石誠彦・森三樹三郎らの先駆的業績以来、長らく中国神話研究の主流であった。本研究は、その成果と方法に学びつつも、それとは一線を画し、あくまで漢代の文脈に即して理解することを目指す。それはもとより、仮構に頼る部分を極力少なくし、より実証的な研究を目指すからでもある。しかしそれ以上に、申請者自身これまでの研究で示してきたように、漢代、とりわけ前漢後半期以降は、歴史伝承や辞賦など、それまでしばしば口頭で伝承されていたものが、組織的にテキスト化されていった時期でもある。本研究は、物語的伝承がテキストに定着するまさにその現在進行形のところに着目するのであり、これがその第二の特色である。

一方、「神話の時代」が去ったのちも、神話的世界観は形を変えて脈々と流れ続け、あるいは民衆の歌に現れ、あるいは国家祭祀のイデオロギーとなった。漢代の物語世界についての研究は、漢代文化の重層性を明らかにし、文学史・文化史における位置づけを再考することともなる。

### 3. 研究の方法

はじめに、漢代の物語世界を研究する前提として、漢代文化の基層にある古代的性格とそこからの離脱について明らかにする。具体的には次の2つの課題を設定する。

#### A-1. 漢賦の形成過程にみる古代的宗教性の変容

漢代に盛行した辞賦の起源については、これまで語源や文体論の面から研究されてきた。しかし、申請者の最近の研究によれば、賦の本質とは、ある物に対し、その名を声に出して唱えることによって霊的に働きかけようとする宗教的行為であった。このような観点によって、「高きに登りて詩を賦す」ことの古代の意味、物の名やその形状を示す語を並べ尽くす鋪陳とよばれる表現法の意味、初期の賦の題材に狩獵・山川など何らかの点で祭祀に関わるものが多いことなどが説明できる。漢賦の形成を、賦の原初的な宗教性が解体されてゆく過程として跡づけたい。

#### A-2. 『史記』にみる古代的宗教性の変容

『史記』は漢代の物語的伝承を豊富に伝えるが、著者司馬遷は、自らの就いた太史令の職を、「文史星歴、卜祝の間に近し」という（「任少卿に与うる書」）。事実、『史記』八書のうち礼・楽・律・歴・天官・封禪の六巻までは、何らかの点で儀礼や宗教に関わる。『史記』の内容それ自体は、全体としては古代的宗教性から離脱しようとする方向にあるが、それが太史令司馬遷によって書かれたことの意味は、改めて顧みる価値がある。一方、褚少孫によって補われた部分は、たとえば亀策列伝では占卜の方法を事細かに記しているが、それは敬虔な宗教性よりは、むしろ好事家的な興味によっている。この断絶は、漢代における宗教性の変容を示すものと考えられる。

続いて、その知見をふまえ、漢代の文学に明示的・非明示的な形で現れた物語を、ジャンル横断的に研究する。特にまとまって現れる以下の四つの群に注目する。

#### B-1. 戦国の世を語る

申請者はさきに、項羽と劉邦の伝承を、天意をめぐる運命の物語として読み解いた（『史記』にみえる秦末漢初の歌と伝説）が、それに先立つ戦国の乱世もまた、漢代においては、劇的な物語として語られた。そこでは勝者よりも、不可避的に生み出される敗者に焦点が当たっており、伍子胥のように、土俗的な信仰との結びつきをうかがわせるもの（『論衡』『呉越春秋』）もある。多くの説話的伝承にみられる隠者の物語や、『楚辞』や辞賦の背後にある「賢人失志」の物語も、こうした敗者の鎮魂の物語に根ざすものであろう。

一方で、戦国の世は、裸一貫ではい上がったたり、舌先三寸で世を動かす成功者の物語として、より世俗的な形でも語られた。『史記』列伝にはこうしたタイプの話がかなりあり、それが敗者の鎮魂の物語と同居している点は、『史記』全体の性格を考える上でも注意される。

#### B-2. 武帝の御世を語る

前漢の最盛期をもたらした武帝については、『史記』に同時代的記述がある。『漢書』礼楽志に

みるような、天の子武帝という筋書に沿ったものもある一方、むしろその暗黒面や満たされぬ思いを述べたものも多い。これまではそれを司馬遷個人と結びつける傾向にあったが、むしろ時代の生んだ物語とみるべきである。『漢書』の李陵と蘇武の話や、後人による李陵と蘇武の贈答詩なども、その延長線上に現れるものであろう。

一方武帝期については、司馬相如列伝のように、現世的欲求に対する無邪気な肯定を反映した巻もある。これらはのちの『西京雜記』を思わせるものであり、作者に疑問の持たれる「長門賦」などもこの流れに位置するものであろう。それはさらに道教的神秘の衣をまとい、『漢武故事』『漢武帝内伝』などの小説へと発展してゆく。

戦国の世の物語が古代との関係を問う手がかりになるのに対し、武帝をめぐる物語について考えることは、魏晋以降までを視野に入れた研究に発展するのである。

#### B-3. 自己を語る

後漢には、文人による創作活動が明確な形をとるようになる。前漢以来の「賢人失志」が受け継がれ、王逸『楚辞章句』のような形に結集されるほか、仮想の問答で人生観を述べる「設論」、あるいは一部の辞賦のように、自覚された自己語りが出現する。これまで作家論や思想史の立場から取りあげられてきたこの問題を、前漢の物語の継受と変容という視点から見直したい。

#### B-4. 日々の暮らしを語る

具体的な史実や個としての自己を語る物語とは別に、変わることなく繰り返される日々の生活により密着した民衆の物語を想定できる。ここでは、古楽府が最も重要な資料となる。古楽府は、内容にも成立年代にも幅があり、背後にある物語も一様ではないことには留意すべきだが、尹湾漢簡「神鳥賦」や、画像石のような非文字資料をも視野に入れつつ、それらの漢代物語世界における位置づけを考える。この作業は、上の三種の物語の基盤を探ることともなるだろう。辞賦が先秦文学を源とするのに対し、古楽府は建安以降の五言詩へとつながってゆく。この両者を研究することで、前漢と後漢との差異や、物語世界の時代的変容にも考察を進める。

以上のような漢代物語世界の研究が、いわば深層に隠れた宗教性の発掘であるのに対し、礼関係の書籍や、『史記』の書、『漢書』の志などには、漢代の宗教儀礼が直接記録される。その点に鑑み、本研究では、さらに以下の課題を設定する。

#### C. 『漢書』礼楽志訳注の完成

『漢書』礼楽志は、漢代の国家祭祀に関する最も系統的な記述である。平凡社『東洋文庫』に収める『漢書』の志の訳注は礼楽志を欠くから、これを補う点でも学界に裨益するところがある。『漢書』礼楽志に収める「郊祀歌十九章」「安世房中歌十七章」については、西川ゆみ・横山きのみ（ともに奈良女子大学大学院生・当時）の協力により、すでに訳注を作成した。その結果明らかになったのは、神の気まぐれに翻弄される『楚辞』『九歌』の世界が、郊祀歌では、天の子たる漢武帝が空に駆け上り自由に神と交わるといった筋書きに書き換えられていることである。本研究では、引き続き西川・横山両名を研究協力者として『漢書』礼楽志の訳注を完成し、古代的宗教性が国家の物語へ組み替えられてゆくさまを究明したい。

### 4. 研究成果

上記研究計画 A-1. の成果としては、まず口頭発表および論文「早期辞賦と山川祭祀」が挙げられる。ここでは、聖地の賛頌・儀礼の挙行・神霊の出現という共通の筋書きをもつ賦について述べた。それらに普遍的な、語を並べ尽くす鋪陳とよばれる表現法について、供物を列挙する名詞的なもの、対象の形状を述べ立てる形容詞的なもの、儀礼の次第を縷々述べる動詞的なものがあることを示し、それが起源的には山川祭祀とかかわりつつ、宗教性を希薄化させて帝王賛歌へと変容してゆくことを論じた。

次いで口頭発表「祭天・祭地・祭物」では、より広く賦の文学全体を視野に入れた考察を行った。賦には楚辞を起源とするいわゆる騷体、漢代に流行した長編の体、四言を主とする短編の3つのスタイルを認めうるが、それらはそれぞれ、天の信仰と異界への志向を示す「祭天の文学」、山川祭祀から地上の権力賛美に転じた「祭地の文学」、物の靈性に支えられた「祭物の文学」と位置づけられるのである。

A-2. の課題に答えつつ、B-1. および B-2. にもわたる成果として、口頭発表および論文「神話・小説・著述：『史記』故事世界的三個維度」がある。ここでは特に項羽と劉邦に関する記述を主な例として、天下を争う英雄、とりわけ新王朝を樹立した劉邦を神秘化しようとする語り、一方で彼らの些末な事績を興味本位に脚色した小説的な語り、それらの物語の奔流の中にあって自らの著述者としての意識を表明する司馬遷自身の語りの3つが、『史記』においてせめぎ合っているさまを示した。

B-1. と B-2. にまたがる成果としては、他に口頭発表および論文「試論西漢士人的宋玉情結」もある。早期の賦の作家である宋玉は、前漢に於いては落ちぶれた弁士として形象化されており、そこには統一帝国のもとで自由な言論を封じられた当時の士の心情が投影されている。こうした「宋玉コンプレックス」が、前漢期の楚辞文学や説話などに広く見られることを、賦の枠を超えてジャンル横断的に考察した。とりわけ武帝期の東方朔は、第二の宋玉ともいえる形象をもつのである。

B-3. に関わる成果には、まず、口頭発表「浅談揚雄“擱下賦筆”」がある。前漢最末期の揚雄は、絢爛たる修辞を凝らした辞賦を一時期相次いで制作し、時の政治への意見を陳述したが、やがて辞賦という文体がその目的を達し得ないことに気づいて筆を折る。このことは辞賦史上の

一大事件として、これまでもさまざまに論じられてきたが、本発表では、揚雄が作者としての自らの意識を「自序」(『漢書』揚雄伝はこれに依拠したという)という形で表現したことに鑑み、この事件を揚雄の生涯全体の中でとらえることを試みた。それにより、揚雄が言語表現に対する鋭敏な批評意識を持っており、それは生涯を通して変わらなかったこと、賦による政治批判を断念したことにより、文学的営為が公的なものと私的なものとに分裂し、それが後漢に受け継がれてゆくことが明らかになった。後漢において、特に賦の文体によって自己を語る事が盛んになるが、その起源は揚雄に求めることができるのである。

口頭発表「從“賢人失志”到“士人守志”——兩漢之交紀行、述志賦中的自我敘述」では、揚雄と同時代の劉歆から後漢にかけての自己語りについて論じた。劉歆の「遂初賦」や班彪の「北征賦」は、失意の旅の道ゆりとそれに対する思いを、歴史への言及をまじえてうたった。王莽に仕えたことを恥じて隠遁した崔篆の「慰志賦」は、旅程の描写こそないものの、同様に大量の歴史故事を引きつつ自らの思いを述べる。これらは『楚辞』『離騷』のスタイルをとりながら、もはや屈原の物語に依拠することなく、直接に自己を表出する。後漢に入ると、班固の「幽通賦」、班昭の「東征賦」、馮衍の「顯志賦」などが続々と現れ、旅の道ゆりをうたう紀行賦と、自らの信条を述べる述志賦とが、類型として確立する。両者はいわば「離騷」の系譜が生んだ双子である。こうして、屈原の伝説と結びついた「賢人失志」の文学は、自己を直接に語る「士人守志」の文学へと作り替えられたのである。研究の少ない後漢の賦について論じるとともに、そこに自己語りの文学の始まりというジャンルを超えた位置づけを与えることができた。

なお、これに関連して、研究分担者として参画した他の研究課題において、後漢の王逸による楚辞の模擬的作品「九思」を取りあげた。そこでは、漢代にふさわしく作り替えられた忠臣としての屈原像と、王逸自身による楚辞の注釈『楚辭章句』との整合性について論じ、本研究のクロスジャンルの視点を取り入れることによって、より豊かな成果を生むことができた。

B-4.に関しては、前漢尹湾漢墓「神鳥賦」に関する考察を行った。この賦は、雌鳥が盗賊鳥に襲われ、夫である雄鳥の前で息絶えるという物語を、四言を主とする素朴な韻文の形でうたったものである。出土した当初は、民話的な内容や古楽府との共通性から、最古の民間俗賦といわれたが、その後、措辞や内容に儒教色が濃厚であることから、知識人の作とする反論がされている。今回の研究では、さらに『史記』に似た迫真の描写や、楚辞にみられる慨嘆の表出など多様な要素が見出され、それらを取り込む賦という形式の総合性が明らかになった。「神鳥賦」については、すでにふれた口頭発表「祭天・祭地・祭物」において、とりわけ「祭物」との関連で言及するところがあるが、独立した論考として十分に展開するには至らなかった。ただ、この賦は短編ではあるが、これまで論じられてきた以上に多くの問題をはらんでいるのであり、研究上の鉅脈を掘り当てたと考えている。

C.については、『漢書』礼楽志の訳注を完成した。その学術的意義に鑑み、万全を期して冊子体の成果報告を作成すべく、研究期間を一年延長したところへ、新型コロナウイルス感染症の影響により、図書館の利用が大きく制限されてしまった。そのため研究期間をさらに一年延長することとなったが、令和3年度に完成にこぎ着け、冊子を作成することができた。すでに公刊した「郊祀歌十九章」「安世房中歌十七章」の訳注と合わせ、『漢書』礼楽志全体の訳注を完成したことになる。

「安世房中歌」には、現在残されている範囲では、それ以前の歌謡からの継承関係を見いだすことはできず、一方で漢代の古楽府との直接の関連も見いだしたい。この孤立性は、「安世房中歌」が、文献に残りにくい歌謡本来の性質をある程度保っていたことを想定させる。一方それより後に作られた「郊祀歌」は、一部の例外を除き、経典であった『詩経』と、経典に近い特別な地位を築きつつあった『楚辞』との表現に強く依拠している。しかし今回訳出した礼楽志の地の文は、漢の礼楽が古の儒教的理想から逸脱してゆくことへの慨嘆で一貫している。それはおそらく、歌辞が権威ある言葉によって粉飾されてゆくのに対し、音楽が皇帝の好みに投じて世俗化・娯楽化してゆくことへの、経典を護持する儒家の立場からの反応であろう。経典の権威の確立と、世俗化・娯楽化への傾斜との二面性は、これまでに検討してきた様々なジャンルにおける物語の変容を考察する上で、有効な視座を提供するものと考えられる。今後、郊祀歌・安世房中歌をも含め、全体をまとめた形で公刊することについても検討していきたい。

以上、研究計画において設定した課題に答え、「物語の時代」としての漢代の見取り図と、その様々な断面とを、ジャンルを超えて明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 谷口 洋	4. 巻 40-2
2. 論文標題 神話・小説・著述 『史記』故事世界の三個維度	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 杭州師範大学学報（社会科学版）	6. 最初と最後の頁 102-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3969/j.issn.1674-2338.2018.02.013	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 谷口 洋	4. 巻 37-1
2. 論文標題 試論西漢士人的宋玉情結	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 信陽師範学院学報（哲学社会科学版）	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3969/j.issn.1003-0964.2017.01.001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 谷口 洋	4. 巻 2
2. 論文標題 早期辞賦与山川祭祀	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 2016賦学国際学術研究会論輯	6. 最初と最後の頁 121-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件／うち国際学会 7件）

1. 発表者名 谷口 洋
2. 発表標題 日本漢文訓読・漢文教育与日本漢学家的研究方法
3. 学会等名 理論与方法：海外中国学論壇（2020）研讨会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 谷口 洋
2. 発表標題 從“賢人失志”到“士人守志” - 兩漢之交紀行、述志賦中的自我敘述
3. 学会等名 第十三屆國際辭賦學學術研討會（國際學會）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 谷口 洋
2. 発表標題 淺談揚雄“攔下賦筆”
3. 学会等名 中國辭賦理論首屆國際高端學術討論會（國際學會）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 谷口 洋
2. 発表標題 神話・小説・著述 『史記』故事世界的三個維度
3. 学会等名 第14屆先秦兩漢學術國際研討會（國際學會）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 谷口 洋
2. 発表標題 早期辭賦與山川祭祀
3. 学会等名 2016賦學國際學術研討會（國際學會）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 谷口 洋
2. 発表標題 試論西漢士人の宋玉情結
3. 学会等名 第3届宋玉国際学術研討会（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 谷口 洋
2. 発表標題 祭天・祭地・祭物 辞賦三体的宗教基礎初探
3. 学会等名 第12届国際辞賦学学術研討会（国際学会）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

成果の一端の報告として、冊子『漢書礼楽志訳注稿（文章篇）』（横山きのみ・西川ゆみと共著、全102p）を作成した（2022年）。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	西川 ゆみ  (NISHIKAWA Yumi)	志學館大学・人間関係学部・講師  (37703)	



6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	横山 きのみ  (YOKOYAMA Kinomi)	奈良女子大学・大学院人間文化研究科・博士研究員    (14602)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関